

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

【事業所概要(事業所記入)】			
事業所番号	4271402374		
法人名	有限会社アプリーレ		
事業所名	グループホームあさひが森		
所在地	南島原市布津町甲489番地		
自己評価作成日	令和5年9月13日	評価結果市町村受理日	令和5年12月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	令和5年11月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所では、代表者が長年、地域の保育園を運営しており、保育園児との交流が気軽に実施できる。利用者さんも年少者との交流を喜び、楽しみにしている。また、芝生つきの東屋を、お茶の時間や日向ぼっこに活用している。コロナ感染下の中、昨年ではあさひが森のつどいを実施できた。今はまだ、コロナ感染下であり、地域交流の実施は無理な状況である。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

国道251号線沿いにあるホームで、平成13年10月にA棟、平成14年2月にB棟が開所し、平成17年12月1日に統合して運営している。ホーム入口には芝生敷と東屋があり、天気の良い日には入居者が散歩したり、おやつとお茶を屋外で食べるスペースとなるなど、入居者が穏やかに楽しみながら生活できるよう支援している。近隣には保育所があり、子どもたちが毎年10月に開催される「あさひが森のつどい」にて琉球太鼓を披露したり、クリスマスにはカナダから英語教師と共に訪れるなど交流している。管理者、施設長、職員数名がホームの近くに居住しており、同じ自治会の中で地域住民と対話する機会も多く、日頃より近隣住民との交流が盛んである。消防避難訓練には、自治会の方々の参加・協力があり、緊急時には連携できるよう関係を構築している。地域に根差した運営は、入居者や家族からも信頼と高評価を得ており、今後も大いに期待できるホームと言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月1回の職員会議で理念を唱和し共有、実践している。	月に1回の職員会議にて理念を唱和し再確認し意識付けしている。	毎月1回開催する職員会議では、倫理綱領や理念を職員全員で唱和し、理念の共有に努めている。管理者は適宜、職員の支援内容を振り返り、理念に基づく支援の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的ではないが、地域の方とは合同避難訓練等で協力関係にある。	保育園児、学童との交流はコロナ禍で減っていたが、すこしずつ交流できるようになった。	ホームの隣にある保育園児からの慰問を受け入れている。入居者との交流を支援したり、自治会の方との避難訓練を実施するなど、ホーム自体が地域の一員として運営し日常的に交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	町内の方の入所も多く、地域の認知度はある。	認知症の理解や支援方法を家族や地域の方に伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議では、利用者の様子や健康状態等の報告も行い、職員会議で推進会議の内容報告もある。ホームのサービス向上に活かしている。	推進会議の中の意見を参考に、サービス向上に活かしている。	2か月毎に開催する運営推進会議には、民生委員や家族代表、島原地域広域市町村圏組合の介護保険課職員、警察官などが参加している。入居者や支援の実際、ホームの取り組みなどについて報告や話し合いを行い、抽出された意見をサービス向上に活かすよう努めている。	

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	包括支援センターから空き状況の問い合わせも兼ねた情報交換はある。	推進会議に介護保険課のかたの出席があり、ホームの取り組みは伝えられている。協力関係を築くように取り組んでいる。	市の担当者や島原地域広域市町村圏組合の介護保険課と日頃より連絡を密に取り合い、ホームの実情やケアの取り組みを積極的に伝えたり、運営について相談するなど、協力関係を築くように取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ユニット会議で話し合い、理解を深めている。	ユニット会議で身体拘束しないケアに取り組んでいる。	身体拘束に関する指針を定め、マニュアルを整備しており、全職員がWEBを活用した研修を受講している。また、ユニット毎に身体拘束適正化委員会を開催し、身体拘束をしないケアにホーム全体で取り組んでいる。	身体拘束に関する指針やマニュアルを整備されており、あらためてマニュアルを確認しやむを得ず身体拘束を行わなければならない場合の要件「切迫性」「非代替性」「一時性」について職員の理解を深めることが望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	注意を払い防止に努めている。	虐待が見過ごされないように、お互いに声を掛け合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性に関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	自立支援事業を利用している利用者さんがいるので、活用を支援している。	研修があれば、学ぶ機会を持ち活用できるようにしたい。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い理解し、納得してもらっている。	利用の開始に説明を行う。契約内容の変更あれば、説明し納得していただけるように伝える。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	できるだけ、家族の方と話し、不満や遠慮が残らないようにしている。支援記録を公開している。	職員会議、ユニット会議に、利用者や家族からの意見があれば、取り上げている。	家族が面会に訪れた際や、電話、LINEなどを活用し、積極的にホームの運営に関する意見を求めている。入居者や家族から集められた意見や要望を実際の支援に活かせるよう取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議を月に1回開き、お互いに意見交換している。	コロナ禍で職員会議に理事の出席がなかったが、管理者を通して情報は伝えている。	日々の支援の合間や、毎月1回の職員会議などで、職員はいつでも意見や提案ができる環境である。代表者や管理者は職員の要望や提案が実現できるよう誠実に関わりを持っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	務めている。	務めている。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	参加を呼びかけている。	コロナ禍で研修の機会が減少したが、課題をネットで閲覧解決している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に入会し交流する機会を作っている。	コロナ禍で交流機会がなかった。今後に期待したい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者、家族の方のお話を聞くことが大切と考えている。	入所時の情報を元に、時間をかけて信頼関係を作っていきたい。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	知らない所で生活する不安を受けとめ、安心感を持ってもらえるような会話を心がけている。	まず、職員のことを知ってもらって、信頼関係を作っていく。会話の中から情報を得る。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	困りごとを親身になって、お聞きするように努めている。	家族の要望をお尋ねし、要望に添った対応を行うように心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	多くの会話を交わして、本人ができることはしていただき、できないことは、一緒に行う。	会話を交わしながら、本人ができること、できないことを確認して支援する。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員の話を聞いていただいて、互いに理解を深める。家族と情報交換しながら、利用者を支援する。	家族との信頼関係を築く。ホームの様子を伝えていきながら、支援する。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	あさひが森便りを送る際、ご本人の様子もお知らせする。コロナ下、面会も状況に応じて実施。	あさひが森便りを送付する際、本人の様子も伝えるコメントの添付。コロナ禍から、状況を見ながら面会を増やし情緒面の安定を支援する。	毎月発行する「あさひが森だより」には、入居者の写真やコメントを添えて、家族らに実情を伝えている。ホームでは友人との面会、墓参り、なじみの美容室に行くことなどを支援し、入居者が大切にしてきた馴染みの関係が継続できるよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症の進行もあり、利用者さん同士の関わり合いは減っている。	孤立を防ぐ。利用者さんの中で気の合う方と食事の席を近くする。コミュニケーションの場を提供し、職員が関わり合いながら支援する。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後にご家族の訪問があった。	退所後でも相談があれば、ホームでできる範囲で対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	プラン作成時には、利用者ご家族の希望をお聞きする。職員間で情報共有する。	プラン作成時には、利用者ご家族の希望をお聞きする。職員間で情報共有する。	職員やケアマネジャーが入居者本人や家族から一人ひとりの思いや暮らし方の希望や意向の把握に努めている。意向の把握が困難な場合は、入居者が本人本位に生活できるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時の聞き取り、入所時サマリーを共有する。本人、家族の情報から、生活歴を把握する。	入所時の聞き取り、入所時サマリーを共有する。本人、家族の情報から、生活歴を把握する。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者さんの前日・当日のバイタルや日常生活の記録を把握すること。	毎日のバイタルチェック、食事排泄の確認、健康状態を把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者、家族、職員、看護師も含めて、意見交換することで、より良い介護計画を作成するように努めている。	利用者、家族より情報提供してもらう。職員、看護師と評価を見直す。	ケアマネジャーは入居者本人や家族の意向を踏まえながら担当職員からの情報や提案を受けている。職員会議やユニット会議にて入居者がより良く自分らしく暮らせるようチームで検討し、ケアマネジャーが介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者さんの心身の変化について、日々の情報共有が大切。毎朝夜勤者からの申し送りから1日が始まる。職員間で情報共有し、介護計画の見直しもしている。	日々の介護の経過を記録し、評価の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に見えるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者さんの状況に応じて柔軟に対応している。	利用者さんの状況に応じて、必要な支援を心がける。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ下の中、地域との関わり合いは減っている。	利用者さんの暮らしが豊かになるように、支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前のかかりつけ医をできるだけ継続受診している。	受診時の情報提供、主治医からの指示の元、健康維持できるように支援する。	ホームの連携医が毎月1回、訪問診療にて来訪し、入居者の健康状態の把握と治療を行っている。入居者や家族が希望する医療機関の受診にはホーム管理者が送迎や付き添い、主治医との情報交換を行っており、主治医からの受診結果を家族等へ報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとれた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に一度の看護指導時利用者さんの変化を伝え、指示・助言をもらい日常の介護に活かす。	看護指導にて日常の様子を報告、看護師よりのアドバイスをもらい介護に活かす。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は、管理者が医師、担当者に病状を伝える。入院中も病院連携室、担当看護師と情報交換する。ホームに早期に戻られるよう支援している	情報を共有しながら、帰所後の適切なケアに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階から家族と話し合いを行う。変化あった時には家族に直ぐに状況説明を行っている。医師、看護師、職員と情報共有し取り組んでいる。	入所時より家族により良い終末や看取りのことを話し合う。ホームでできること、できないことを説明しながら、支援に取り組んでいる。	ホームでは看取りについての指針やマニュアルを定めており、入居者や家族には入居時に説明している。看取りが必要になった際に「意思確認書」へ同意とサイン・押印を受領している。主治医、看護師、職員が連携し、看取りの支援に努めている。	看取りの指針やマニュアルを整備しているが、今後、更に全職員が終末期のあり方や看取りの段階について理解を深め、チームで支援に取り組めるよう連携し共通理解を図ることに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	実践力を身に付けているとまではいかない。	利用者の状態を把握し記録、報告することが大切と思う。実践力については自信はない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	秋には、毎年地元自治会に参加してもらって避難訓練を実施している。昨年は「コロナ下で消防署との連携はできなかった。業者の定期点検の実施、職員のホーム内自主点検実施している。	コロナ禍で消防署との連携がない。自主訓練となっている。	消防避難訓練は自治会の方の参加があり、入居者が円滑に避難できるよう態勢を構築されている。今回、地震発生後の火災を想定した避難訓練を開催しており、自然災害に対する避難訓練も実践している。	備蓄品一覧表に消費期限(賞味期限)の記載がない。一目で管理しやすいよう消費期限(賞味期限)を明記して管理することが望ましい。また、緊急時の持ち出し品を準備しているが、まとめて持ち出しにくい状態であるため、例えばリュックサックなどを準備して持ち出しやすい場所に保管すると共に、職員にも周知しておく事が望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者さんにあった、言葉がけと対応を心がけている。	利用者さんの個性を尊重し不快な思いをさせないようにきをつけている。	職員は日頃より入居者一人ひとりの人格尊重に努め、丁寧な声かけや、対話に努めている。また、入居者一人ひとりのプライバシーを守るため、広報誌などへ写真を掲載する場合は、入居者及び家族より同意を得て発行している。	

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	排泄や入浴の声かけを行う中で、自己決定を働きかける。会話の中で何か希望あるときは、傾聴する。	希望をお聞きして寄り添う。自己決定できない方には、会話中から、くみ取る。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	希望に添って支援している。	希望に添ってしえんする。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	おしゃれの支援とまではいかないが、自分が着たい服の要望があった時は、着ていただく。	本人にお聞きする。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者、職員と一緒に準備や片付けは行っていない。コロナ下、状況を見ながら食事を摂っている。	高齢化。ましてやコロナ禍で一緒に調理準備とうしていない。	食事は地元の商店で購入する旬の食材を用いた手料理を提供している。毎月の誕生会では入居者が希望する刺身や天ぷらなどの食事を提供している。入居者が季節を感じられるよう正月にはおせち料理を提供するなど工夫している。希望する入居者には、テーブル拭きや食材の皮むきなどを手伝ってもらい、食事を作る楽しさを支援している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の利用者に応じて食事量の調節をする。嚥下の状態に合わせてとろみをつけたり、刻み食・ミキサー食にする。口から食事が摂れるような工夫をしている。	口腔の体操をして誤嚥を防ぐようにしている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者の能力に応じて、自力でできる方は自力、または見守り。できない方は職員が介助している。	利用者の能力に応じて、自力でできる方は自力、または見守り。できない方は職員が介助し、清潔保持している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表に記録し共有する。時間を見てトイレ誘導、声かけしている。	排泄チェックをして、排泄パターンを把握する。トイレ誘導、パット交換等を行う。	排泄チェック表を作成し、入居者一人ひとりの排泄パターンの把握に努めている。入居者一人ひとりの排泄のタイミングに応じてトイレ誘導し、入居者自身が排泄できるよう自立に向けた支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の間隔が遠いときは、バナナ等を食べてもらう。牛乳の提供もしている。便秘薬の調整。	利用者さんが負担にならないように排便間隔を把握、調節する。排便しやすくなるような食事の提供。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は設定しているが、他の要望は聞かない。また個人の体調に合わせてシャワー浴や清拭等を実施している。	バイタルチェックし、体調に応じた入浴となる。入浴できないときは陰洗、清拭する。	入居者の体調や気分に応じて週3回以上は入浴できるよう支援している。入浴を拒否し、入浴できない場合は清拭にて対応し、清潔保持に努めている。冬至にはゆず湯を提供するなど季節を感じながら入浴を楽しめるように取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室内温度や外からの光にも気をつけ調整し、気持ち良く眠られるように支援している。	一人一人の生活リズムに合わせて休息、睡眠をとれるように支援する。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診、往診後の薬の処方を確認する。利用者さんに薬を用意する、渡す、服用するまで必ずチェックする。	内服、外用薬の管理は職員が行う。投与時は呼名し、服薬後の確認をする。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみ、トレイ拭き、箱作り等利用者さんをお願いしていたが、コロナ下でできなくなった。午前・午後のCD体操、個別の軽いリハビリを一緒にしている。	利用者さん各自がテレビ鑑賞、雑誌を読んだり、編み物をされて過ごし、気分転換を図っている。		

自己	外部	項 目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染の心配あり。ほとんど外出していない。	コロナ禍も落ち着いてきたが、ホーム外の外出は控えている。	ホームに隣接している芝生敷や東屋まで散歩で出かけて、おやつやお茶を楽しんだり、春には桜の木の下で花見を楽しむなど、入居者一人ひとりの希望に沿った外出支援に努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人でお金を管理している利用者はいない。買い物の希望があれば支援している。	金銭管理をしている方はいない。1名の利用者さんが自分の財布をもっておられる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	支援している。	携帯電話を持っておられる方が2名おられる。他の方は、電話したい時に家族につながるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温、日射しを調節して集まりやすい雰囲気を作るようにしている。食堂の外の庭に草花を植えて、眺められるようにしている。	家族の写真を飾ったり、故人を偲ぶ品を居室に置いておられる。利用者さんが落ち着くように、居心地良く安心して過ごせるように支援している。	ホームのリビングや廊下には季節感のある壁画や、書、手作りの小物、入居者と保育園児が交流した写真などが飾られており、居心地良く安心して過ごせる空間となっている。リビングの大きな窓は開放感があり、暖かな日差しがあり、心地良いつくりとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:あさひが森A)	実践状況(ユニット名:あさひが森B)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂では、新聞を読んだりテレビを見たり、お話をしたり思い思いに過ごしている。	食堂でおやつや食事を摂る時には、利用者さん同士の会話がある。リクリエーションへの参加もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真を壁に貼ったり、作品を掲示したりしている。また、ベッド・ソファの位置を考慮したりと居心地をよく過ごせる工夫をしている。	利用者さんの好みや体調に合わせて、自室の中を工夫し、希望の物があれば、ご家族に相談する。	居室は入居者一人ひとりの生活動線を検討し、自立を促すようなベッドや家具の配置に努めている。入居者本人が使い慣れた布団やテレビ、椅子、テーブル、タンス、仏壇を持ち込むことができ、壁には家族の写真を飾るなど、本人が居心地よく過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下には手すりがついており、バリアフリーにもなっている。居室では排泄が安全にできるように、ベッド等の配置を配慮、工夫している。	廊下には手すりがついており、バリアフリーにもなっている。居室では排泄が安全にできるように、ベッド等の配置を配慮、工夫している。		